

## 編集後記

国内における新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大から2年が経過し、コロナ禍のたいへんな状況の中、ここに神戸市立病院紀要第60巻をお届けできることは、われわれにとって大きな喜びであり、投稿していただいた方々、それらの研究を支援していただいた多くの方々、編集委員会の方々に心より感謝を申し上げたい。

この第60巻では、総説1編、原著論文3編、そして医療研究報告2編と、たいへん充実した内容となっている。総説は、急性胆嚢炎についてわかりやすい解説がなされ、多くの医療従事者にとってバイブルとなるものである。原著論文では、移植医療のうえで大きな障害となる移植片対宿主病 (GVHD) の予防の観点から、患者さんにとって安全で有効な血液疾患治療のエビデンスを示した論文に加え、コロナ禍に奮闘したわれわれの軌跡を残し、また、世界に発信する英文での2編も掲載し、この60巻に特別な価値を与えている。院内感染に留意しての安全な手術の実施、人工呼吸管理下でも COVID-19 患者さんの ADL を維持し、よりよいアウトカムをめざすリハビリテーションの介入は、多くの医療機関にとっても参考となる内容である。そして、医師に限らず、全職種に発表の機会を与える場として設けられた医療研究報告の2編、関心が高まっている乳がん診断における乳腺密度に関する研究と、コロナ禍で第一線に立って奮闘された看護部の活動記録も、この第60巻において重要な意味を持っている。

さて、今回のコロナ禍は、診療のみならず、

臨床研究においても大きな影響を与えている。厚労省もオンライン診療を本格的に進めており、受診機会も減少する中、臨床指標の評価手段も、直接患者さんと接して評価する従来の方法では難しくなっている。そこで、ICT を活用したエレクトロニック・ヘルスレコード (EHR) の整備は重要な課題である。われわれの呼吸器の領域であれば、在宅での呼吸機能データ (ホームスパイロメトリーや酸素飽和度)、1日の歩数などの身体活動量、患者中心のアウトカム (Patient-centered outcomes) で重要な健康関連 QOL のスコアなどの遠隔モニターである。ぜひ、今回のコロナ禍を逆手にとり、市民病院機構における臨床研究も含めた医療の DX が進むことを期待して、このコロナ禍第60巻の編集後記としたいと思う。

神戸市立医療センター西市民病院  
副院長兼呼吸器内科部長

富岡 洋海